

宮崎県串間市（国内 25 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 7 年 1 月 11 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 基本情報

用途（飼養羽数）：肉養鶏（約 3 万羽）
発生家きん舎の構造：開放鶏舎
発生家きん舎の飼養形態：平飼い

2 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は山間部にあり、農場は雑木林に囲まれていた。農場入り口前には約 50m の登り坂があった。
- ② 農場南東約 100m には小川が流れているが、調査時、野鳥は確認されなかった。
- ③ 当該農場は鶏舎及び管理棟で構成されていた。鶏舎は北側から 1 号～3 号鶏舎となっており、発生鶏舎は 1 号鶏舎であった。また、北側に別の肉養鶏農場が隣接していた。
- ④ 農場周辺に大きな湖沼や河川などはなく、農場南西 7 km 程にある河川において、数十～100 羽規模のカモ類を確認した。

3 通報の経緯・発生時の状況

- ① 農場主によると、発生鶏舎（通報時約 40 日齢）の通常の死亡羽数は約 4 羽であったところ、1 月 8 日、9 日にそれぞれ 14 羽、17 羽死亡し、1 月 10 日、鶏舎中央で散発的に 28 羽の死亡が確認されたことから、農場指導員と管理獣医師に連絡。管理獣医師が鳥インフルエンザ簡易検査を行ったところ、陽性が確認されたことから、家畜保健衛生所に通報を行ったとのこと。
- ② 調査時、発生鶏舎は殺処分済みであった。隣接する 2 号鶏舎は、沈鬱等を呈する個体は認められなかった。

4 管理者及び従業員

- ① 当該農場には、農場主の他従業員はいなかった。また、ヒナの導入や出荷の際には契約会社から作業員が動員されて、作業を行うとのこと。
- ② 当該農場を担当する農場指導員及び管理獣医師は別の系列農場の指導も行うが、秋以降は HPAI の発生状況を踏まえ、農場に立入らず、農場入り口外で農場主への指導や簡易検査を実施していたとのこと。

5 農場の飼養衛生管理

- ① 農場入口には立入禁止看板が設置されていた。車両が衛生管理区域内に入場する際には、登り坂入口において、動力噴霧器で運転者自ら車両消毒を行っているとのこと。農場主は通勤時に農場入り口直前に駐車し農場に立入っていた。
- ② 農場主が衛生管理区域に立入る場合は、管理棟で農場専用の作業着及び長靴に着替え、手指を消毒し入場するとのこと。農場指導員及び管理獣医師が農場に入る際は、登り坂入口で衛生管理区域専用の作業着及び長靴に交換し、手指を消毒の上入場するとのこと。飼料運搬業者については、飼料基地にて車両、長靴及び衣服の消毒後、農場へは直行直帰し、農場入場時には入場記録簿への記録を行い、管理棟にて専用長靴への交換及び手指消毒を実施しているとのこと。
- ③ 鶏舎に入る際には、鶏舎内に置いている各鶏舎専用の長靴に交換した上で手指を消毒し、衣服の交換は行わず鶏舎内に入るとのこと。
- ④ 発生鶏舎では、自然換気し、入り口と逆の妻側で換気扇による排気を行っていた。排気用換気扇については、舎内の温度に応じて自動で運転されていた。

- ⑤ 飼料タンクは自動で、閉鎖系のラインで鶏舎内に飼料が供給されていた。
- ⑥ 当該農場では通常農場単位でのオールインオールアウトが行われていたが、発生時のロットについては、全ロットの出荷日のずれにより、1及び2号鶏舎より3号鶏舎の飼養鶏が2日若かった。
- ⑦ 除糞作業はオールアウト後の空舎期間（18日間）に実施され、業者が搬出から運搬までを行うとのこと。
- ⑧ 疫学調査時、発生鶏舎では一部野生動物等が侵入可能と考えられる隙間が認められた。また、調査時、入り口は作業のため扉が取り外されていたが、扉を閉めた状態で、若干の隙間があるとのこと。
- ⑨ 給与水には、塩素消毒された井戸水を使用しているとのこと。
- ⑩ 死亡鶏は毎日の健康観察時に回収し、登り坂入口付近に設置されているプレハブ内の冷凍庫で保管し、オールアウト時に業者が回収するとのこと。
- ⑪ 鶏の導入時及び雨が降った後に、鶏舎入り口はじめ周辺に石灰を散布するとのこと。

6 野鳥・野生動物対策

- ① 農場主によると、オールアウト後の空舎期間中に鶏舎の梁に殺鼠剤等設置していたとのこと。農場主によると、時々ネズミを見かけるとのこと。
- ② 農場主によると、農場南西のスギ林でカラスを見かけるが、農場内で見かけることはほとんどないとのこと。調査時、当該スギ林で、カラスの鳴き声が聞こえたが、農場敷地内の地面や鶏舎の屋根などでカラスを見かけることはなかった。
- ③ 農場主によると、農場南東側の県道で、イタチを見かけることがあるとのこと。

（以上）